

たぐみ

Craftsmanship

特集 秋田の手仕事展

第7号

「わらびのこう」と

東北の民藝品

恩地日出夫監督の映画「わらびのこう」が十月初旬から、新宿東映パラソ

2で公開されている。たぐみ第六号でも紹介したように、この映画は山形県最上地方を舞台に、豪雪と凶作の中を生き、そして死んでいく村人たちの姿を悲しくも美しく描いたものである。

山形には限らないが、東北や北陸の豪雪地帯は真冬には六メートル以上も雪が積り、隣部落に行くこともままならない日々がつづく。

昭和になつてからも、世界恐慌や冷害による都会への出稼ぎや、海外出兵による徴兵によつて農村の労働人口が激減し、また肥料や飼料も不足するなか、寒冷地農村は残つた村民をすら養い切れない状況がつづいた。

娘たちの遊郭への身売りの多発は、とくに雪国出身の軍人達の義憤を招き、

軍国主義的拡張策の背景ともなつた。

そういう中で、柳宗悦を中心とする民藝協会の人たちが、雪国とりわけ東北地方の民藝品、農業副産物の振興とその指導に、数年にわたつて力を尽したことをご存知だろうか。

事のきっかけは昭和十二年三月、農林省の積雪地方経済調査所の山口弘道所長からの、東北地方の民藝品調査の依頼であつた。山口は濱田庄司と府立一中の同級生であり柳とも知己であつたというが、山口の熱意は柳を動かし、それから数年にわたつて各地の民藝品の調査や製作指導と、たぐみを經由しての販売が行われた。これらの努力は東北各地で実を結び、秋田県でもそのころの柳たちの足跡の及んだ所、指導による品々は数多い。角館の樺細工、大館の曲わつば、各地の鍛冶屋仕事もそうだが、何よりも山村の藁やあけび、イタヤなどの細工物は、真冬の副業としての名残りをとどめ、なつかしくも心に残るのである。

(志賀直邦)



樺細工 琴爪入(左)と薬籠



くるみ(左)とぶどうの手さげかご



川連漆器 線香入(左)と蓋付き片口



いたや細工 おにぎり入(左)と状差し

たくみ企画展
秋田の手仕事展 — 北国の木と樹皮と漆 —

会期 十月三十一日(金)～十一月八日(土)
会場 たくみ二階ギャラリ
品目 秋田杉桶樽 大館曲げわっぱ 樺細工
いたや細工 あけび細工 ぶどう細工
川連漆器 その他



秋田杉桶樽 祝樽

角館と樺細工

石橋正則

藤沢周平原作、山田洋次監督の映画「たそがれ清兵衛」が昨年末に公開され話題になった。幕末の東北・庄内地方の小藩が舞台だが角館の武家屋敷でも口ケが行われた事もあり、早々期待を膨らませ観せていただいた。リアリ



店の前庭に立つ石橋正則さん

テイ溢れる映画を観るにつれ主人公の暮らしぶりが角館の下級武士の姿に重なって見えてきた。映画では主人公が每晚手内職として虫籠作りをしていたが角館の武士は樺細工作りを同じようにやっていただろう。薄暗い居間の囲炉裏の前に座し、赤々とした炭火とぼんやりとした蝋燭の灯りを頼りに黙々と手を動かす。時折焼いたコテを桶の水にジユツと浸し、熱を加減したところで力強く丹念に桜皮を押しえ付けていく。傍らの娘は椋の葉で仕上げのツヤ付けを行う。そんな情景が浮かんできた。映画を観た後、古樺細工の印籠を手にとってみた。あたたかなツヤと丁寧な仕事ぶりを見ると作り手の手間のかかり様は相当のものと思像できる。微緑ながら士分であるという誇りを持ち、樺細工という仕事にひたむきに取り組み、貧しいながら心豊かに生きた角館武士の心を感じることができた。

話は変わるが最近、近くに住む、お

ばあちゃんが亡くなった。明治四十三年生まれの九十四才。十一人の子供を育て、多くの家族に囲まれての最後だった。葬式の際、若い時の話を聞いた。彼女は樺細工の胴乱作りをして子供達を育てあげたという。毎日夕方まで胴乱を作り、出来た胴乱を問屋に持って行き、その代金で米を買いそして遅い夕食に間に合わせたという。彼女の姿を見て実弟が樺細工職人となり多くの職人を育て、現在、その職人達が伝統工芸士として活躍している。今日の樺細工振興の一翼を担ってくれたと、おばあちゃんへの弔辞は樺細工士・小柳金太郎氏であった。小柳氏は柳宗悦をはじめ諸先生から民芸・樺細工の本格的な指導を受け、現代の名工でもある角館樺細工士の重鎮。あらためて角館の中で樺細工が多くの暮しの支えになってきたか、そして多くの人に育てられて今の樺細工があることを感じた。

(いしばし民芸店)

丸セイイ口の特注品

浅井幸裕

電話注文で丸セイイ口の注文が入った。見本が有る事を思いだし、納期が二、三週間程度かかる事を答えた。さっそく



セイイ口を作る浅井幸裕さん

く製作に取り掛った。作業は順調に進んだ。出来上り日に合わせて、丸セイイ口の底に入れる竹の丸スタレを注文する事にした。ここから問題が起きた。

毎回注文する竹屋さんに丸スタレを発注したところ、今は取り合っていないとの返事だった。いろいろと聞いてみたところでは、いままで作っていた人がやめてしまったと聞いた。小さな丸の竹スタレは手間がかかる事は知っていたがやめてしまったとは残念。

大至急二、三社に問い合わせしてみたが、どこも今はやってないと返事がきた。いろいろと聞いてみたところ、丸の竹スタレは、中国からの輸入品がほとんどで国内では簡単な加工しかしていない事、又、特注で数量が少ないと

加工しない事も知った。輸入品は寸法が決まっている事も知った。今回注文のセイイ口径は、輸入品の寸法からはずれるので、竹スタレの径に合わせて再度作り直すか、竹スタレが高くなっても特注スタレを捜すか、数日間迷った。発注先のお客さんに電話して丸竹スタレの件を説明した。径を変えては、お膳とのバランスがくずれるので寸法は変えないでほしいとの事、新しい見本を送って返事を待った。容量を同じくする為、径を小さくし、高さを少し高くした。お客さんにいろいろと説明して、寸法を変える事にした。始めの木取りからやり直しであった。納期は約三カ月かかったと思う。これより特注の丸セイイ口は、輸入品の竹スタレ径に合わせている。今までは、丸セイイ口の場合はお客さんの希望の寸法で作っていたが今では輸入品の丸竹スタレ径に合わせて作る様になった。

(大館曲わっぱ曲師)



おひつを作る佐野晴樹さん

桶作りの 理想と現実

佐野晴樹

今年はどういうわけかやたらと地震が多い。二、三日前にも地震があった。結婚した翌年にも大きな地震があり、妻が大きなおなかを抱える様にして、外にとび出したのが思いだされた。後で、その地震は「日本海中部地震」と名づけられた。その年に生まれた長男

が今年、はちちになり、私自身も五十才になった。この仕事についてか三十年以上が過ぎた事になる。ここ数年は、各地のデパートの工芸展、物産展といった催事に出かけることが多く、年々十回を超えることもある。自分の理想としては、あちこち出かけて行かなくても、マイペースでじっくり腰をすえて桶のことだけを考えて生活が出来ればと思っているが、県内の仕事だけでは、それも難しい状態です。全国各地に行けて、いいですねと言われるが、催しが連続することもあり、デパートとホテルの往復だけで、観光などは、ほとんど出来ないのだ、結果としては、全国を移動して仕事をしているに過ぎないのである。バブル崩壊後、ここ数年の不景気は各地においても共通のものらしく、その町の繁華街と言われている場所でもシャッターを降ろしたままの店が目につく。こう

した現実を目のあたりにして、この後、どういふふうになって行くのかという不安がないわけではない。仕事の材料である天然秋田杉も平成十九年には伐採計画が無くなる事が決定されており、その後は高齢級の造林杉に代替していかなければならない。造林杉で、工芸的な物をつくるとなれば、製作方法そのものを変えなければ、いいものを作る事が出来ない様な気がしている。

デパートの売り場に立って見ると、今のお客さんは、とても目が肥えているのに気づく。私達の商品は比較的、年齢層が高い。というのは考えてみれば、誰もが、細かく分かれた一つの分野においては何がしかの専門家なのである。私達は、そういった人達に買っていたく仕事をしていかなければならない。不況、テロ、戦争、北朝鮮、と暗い話題の多い中、ものづくりとして、一日一日コツコツと、おだやかに過ごしたいと思う。

(伝統工芸士)

赤坂先生への手紙

田口 召平

この前は遠いところをわざわざ太平までお越し頂きまして本当に恐縮しております。それに、別冊東北学(赤坂憲雄責任編集)六号に載せて下さるとは嬉しいも寄らないことでした。ありのままを語り、無意識で接しさせて頂いたのが、あの様な私たちの刊行物に変わ



自作の箕を手にする田口召平さん

六号にも次(じ)年(ね)子(ご)や宮床(みやとこ)箕(み)についての調査報告が掲載されていますが、中には誤った記述が堂々と載っていることがあります。失礼とは存じつつも敢えて指摘させて頂きますが、先の四号「民具から見た列島の文化史」S先生のものです。

わるとは、渡辺君をも含めて予想だにしなかった事でした。他人さまに読んで頂くことに、応分の抵抗感を覚え、菌(かび)がゆきさも感じて居ります。

さて、箕(み)について私(わたし)なりの考えを述べさせて下さい。

箕(み)の中で生(なま)を享(た)げ、そして箕(み)の中で育(そだ)った者(もの)にとつて、ひと倍(よこ)の関心(かんしん)事(こと)として、その一部始終(いちぶしじう)を見続(み)けてまいりました。そんな関係(かんけい)からか、近年(きんねん)数(かず)々の出版(しゅつぱん)物(ぶつ)にも箕(み)の写(し)真(ま)や記(き)録(ろく)が見受(みう)けられる様(よう)になりました。別冊東北学

東北(とうほく)の片(かた)口(ぐち)箕(み)の記(き)述(じゆ)がヨコがイタヤの木(き)、タテは桜(さくら)の皮(かわ)とありますが、これはタテはフジです。しかも青森(あおもり)県(けん)立(た)ち郷(ごう)土(ど)館(かん)蔵(ざう)の箕(み)は、産(う)地(ち)は南(なん)郷(ごう)村(むら)の世(よ)増(ぞう)集(しゅう)落(らく)の物(もの)です。今(いま)はその集(しゅう)落(らく)はダム湖(こ)になつてしまひ、畑(はたけ)内(うち)集(しゅう)落(らく)も含(こ)め三十(さんじゅう)数(すう)戸(こ)は二(に)方(かた)所(ところ)程(ほど)の団(だん)地(ち)へ移(うつ)転(てん)し、現(げん)在(ざい)箕(み)は作(つく)られておりませぬ。その面(めん)影(えい)は、南(なん)郷(ごう)村(むら)立(た)ち資(し)料(りょう)館(かん)で確(た)か認(にん)すること(こと)が出来(こ)ますが、イタヤ、フジ、ヒカゲノコ(ひかげのこ)ンゴウ(こんごう)の三(さん)種(しゆ)類(るい)の材(ざい)料(りょう)が使(つか)われ作(つく)られておりませぬ。

東北(とうほく)は箕(み)の宝(たから)庫(こ)と位置(ち)づけた(と)思(おも)つて居(ゐ)り、三(さん)島(しま)町(まち)の樹(じゆ)皮(かわ)の箕(み)や面(めん)岸(がし)のニキヨウ箕(み)、馬(ば)場(ば)目(め)箕(み)、摩(ま)当(とう)箕(み)、東(ひがし)目(め)屋(や)箕(み)、どれ一つ(ひとつ)取(と)つてもその土(ど)地(ち)の匂(にお)いを感じ(かん)させてくれる代(しろ)物(ぶつ)ばかりな(な)です。手(て)許(もと)にある各(かく)地(ち)の箕(み)に触(ふ)れると先(せん)人(ひと)の知(ち)恵(え)がし(し)のばれます。民(たみ)俗(ぞく)学(がく)の先(せん)生(せい)方(かた)、もつともつと現(げん)場(ば)主(しゆ)義(ぎ)に徹(てつ)して(して)ください。たか(たか)が箕(み)されど箕(み)な(な)の(の)で(で)す。

(秋田市太平箕作り職)

あけび細工談議

語り手 中川原信一
聞き手 三浦正宏



歌をうたう中川原さん（左）と三浦さん

三浦 今年はや夏の天候不順で農作物はあまり良くないようですが、あけびのつるはどうですか。

中川原 あけびつるは今年が特に悪い

ということはありません。むしろ、ふだんはあまり採れない所で採れたりしています。

三浦 中川原さんが使うあけびつるはどのあたりで採るのですか。

中川原 仙北平鹿地方から山内村あたりまでのいわゆる奥羽山脈の山です。

三浦 そこは昔からの場所なのですか。

中川原 そうです。つる採りの場所は昔も今もほとんど同じ場所です。また、

つるの太さや質も、その年々によって出来、不出来はありますが、昔も今もそうかわりはありません。ただ、採れる場所は狭くなっています。たとえば葛（くず）の葉のことですが、昔は家畜の飼料として葛は刈り取られてしまい、そのあとにあけびが伸びたものでしたが、今は家畜が少ないので葛は伸び放題で、あけびの出る場所がないのです。細工に使うあけびつるは、上に伸びたものではなく地面を這って伸びたものでないのだめなのです。

三浦 中川原さんのかごは名実ともに日本一ですが、作るときに心がけていることはありますか。

中川原 俺は親父の作るところを見てかご作りを覚えました。親父は作るものによしあしをつけず、一つ一つものをそれぞれ最良に作りたい、たいたいものを作りたいという人でした。俺も同じように、とにかくいいものに作りたいと思っています。

三浦 中川原さんは、八幡神社の掛け唄でもチャンピオンですが、どうしたらうまく歌えるようになるでしょう。

中川原 まず仙北荷方節をしっかりと覚えること。それから七七五の文句を考えて、あとは元気に歌うことです。俺は民謡だけでなくジャズでもポップスでも音楽は何でも好きなのです。今度また山の温泉に行つて、一杯やりながら歌でも歌いましょう。十月末までに頑張つてかご作りをして、たくみさんに荷物を送つてから行きましょう。

中学校の中の 「小さな暮らしの美術館」

鈴木 勲

私が民藝とはじめて出合ったのは、

もう四十年以上も前、学生の頃でした。

新宿の百貨店を見て、どうしても欲しくて購入したのが会津本郷宗像窯の白釉徳利でした。不調法で左党の方にお

叱りを受けそうですが、今も一輪差として愛用しております。途中間も空き

ましたが、焼き物を中心に少しずつ買いました。焼ぎ物を中心にしておりまし

た。しかしここ十余年は、自分のためだけになく、教え子の子供達に本物に接し

て欲しいという思いで、かなりの数が増えました。

私はこの三月まで中学校の美術科教諭として教壇に立っております。私には上手い絵が描けたら満足という生徒に、もっと美的環境に眼を向けさせ

たい願いがありません。

今の子供達は、部活動や塾通いに忙しい毎を送っています。とても美術館に出かける時間はないでしょう。たとえ時間がつくれても、果して何人が

美術館へ足を運ぶでしょうか。その何人かのためではなく、多くの生徒に日

常生活を美しくする力をつけさせる大切な目的が美術教育にはあるはず、そんな思いで美術室の壁際に展示コーナ

ーを設けることにしました。

複製画ではなく本物を、できれば普段使えそうな品、かつて普通の人々が

日常使っていた器などが展示できればと夢を膨らませながら、「小さな暮らしの美術館」がスタートしました。

いつも同じ展示では子供達が興味を

示してくれないので、学期毎、年三回の模様替え、できれば入学してから卒業までの三年間は同じ展示を避けたい、

となると、かなりの数が必要です。乏しい小遣いでは自ずと小物が多くなり

ました。美術室の大きさからすると、大皿でまあまあ、七寸皿だと小皿ぐら

いにしか見えませんから、器を見つけない生徒にどう印象づけるか、気を配りました。

匠たちの型絵染や沖縄の紅型びんがたと同じ壁面に生徒作品を並べたり、台上的器

には布製の野菜やガラス玉等をあしらいました。お陰様で生徒からは、今度の展示は好きだとか、次は何の展示か

とか反応が見られるようになりました。

たくみの皆様の紹介で何人かの作り手を訪れる機会も得て、貴重なお話を伺い、生徒に器と作り手の橋渡しの話

ができたのも嬉しい事でした。その中でも「小さな暮らしの美術館」の話

をしたところ、生徒たちにと二尺の大



「この人、この窯の仕事」の展示。手前は生徒の机。



「くつろぎの時-ティータイム」の展示。

鉢を贈って下さった会津本郷の宗像利浩様や、呉須絵唐草文の大皿は沖繩読谷山焼北窯の松田米司様から、藍染筒描き風呂敷をどうぞと手渡して下さった紅型染の城間栄順様の奥様など、多くの方々からご厚意、ご援助をいただ

いたのは、忘れられない出来事です。お陰様で美術室の大きさに相応しい大物も展示できました。また作者からいただいた事を生徒に話しましたら、素晴らしい仕事をする人もすごいけど、もらった先生もけっこうすごいと、私

の株もあがり、棚からぼた餅とでもいまいしょうか、物だけでなくたくさんのお恩恵をこうむりました。

展示をとおして、少しは生活に目を向けてもらえるようになったと思っておりますが、思わぬ処で効果があったのが驚きでした。美術室で走り回る子供達が減った事です。特別教室は普通教室より大きいので、以前は追っかけごっこが絶えなかつたのです。そのため休み時間に何度か注意をしなければならず、自ずと不愉快さは否めず学習への雰囲気づくりに支障が来しました。周囲に器を並べられては走るに走れなかつたのでしょうか。叱らずとも自然と室内での過し方ができるようになりました。本物の為せる技でしょう。「鉄の暴風に耐えて再生した沖繩の華、琉球紅型」「人間国宝芹沢銈介の團扇絵」「東北最古の登窯、会津本郷宗像窯」「濱田庄司、島岡達三と益子窯」「やちむんの今を担う、松田米司



「九州の窯を訪ねて」の展示。壁面は生徒の型染作品

の仕事」「九州の窯をたずねて」「左利きの匠、山田真萬の仕事」「この人、この窯の仕事」「人間国宝島岡達三作陶展」「くつろぎの時―ティータム」
「次郎さんの魚が笑っている、金城次郎の仕事」これらが今まで学期毎に展

示してきたテーマでした。

転任した職員が友人を誘って訪ねてくれたり、授業参観日に、卒業した子供の保護者の方がここが楽しみだからと来て下さったり、展示に役立ててと卓布を下さった方等、多くの方に助けていただきながらここまでやってきました。

「小さな暮らしの美術館」は、なんとといっても、たくみのご協力がなければできなかった事です。作り手の紹介やもう手に入らぬと思っていた二川の松絵の甕、芹沢先生の、ようこそ暖簾、いろは四枚組団扇絵等々、ずい分と無理をお願いしました。

現在は定年退職をして、好きな型絵染をポチポチやっていこうと思っております。学校の時とは比べようもない小さなスペースですが、自宅に展示コーナーを設け、ご近所の方々に見ていただけるようにしております。

特別企画

民藝運動の作家と

職人の仕事展

―ふだんの暮らしと蒐集の品から―
会期 11月22日(土)～29日(土)
会場 たくみ2階ギャラリー

民藝品も、作家の作品も、使ってこそその良さがわかり、楽しさも深まります。

暮らしに用いたものは、古くとも生きております。何かしら新しい発見があるかも知れません。

作家 浜田庄司、芹沢銈介、武内

晴二郎、金城次郎、生田和

孝ほか

品目 陶磁器、木工品、海外の布

雑貨

書籍 工藝、民芸手帖その他工藝
関係書物いろいろ

〈秩父からのたより〉

古民家移築再生事業のこと (一)

山下 治

民藝運動が人間の心(精神)の向上をめざす運動であるとの教えを知って以来、私たちの生活が手仕事を求める暮しとなり三十年経ちました。各地の手仕事我が家の生活に入ってきて来て、銀座「たくみ」さんとおつきあひも長くなりました。

昨年「たくみ」復刊第一号が届いてから、次の号を心待ちにし、民藝運動の古い時代やさまざまな情報を楽しみしています。

今回、本紙をお借りし、現在私共の進めている古民家の移築再生事業のことを紹介したいと思います。

物づくりの究極は、染、織、陶、紙や、多くの素材で作られる住居^{すまい}の建築に集大成されます。

現在、立派な材料による古民家が、

毎年何万戸と破壊され続けています。家づくりにかかわるあらゆる技術を残し、次代へ伝える事も現代人の残すべき仕事のひとつとも思います。

この度の民家移築の事業が、技術の伝承と併せて環境破壊を少しでも緩和できれば等と大それた思いもあります。

古民家再生のプロセスは、まず家探しと解体再生の業者探しです。幸い家探しは、新潟市の㈱グリーンシグマの山崎完一氏、星名康弘氏等の協力によりました。同社は文化財や古建築の保存事業に実績があり、鳥取県の石谷家住宅の再生、公開や新発田城の再生等々、全国的に活動している会社です。石谷家には、吉田璋也氏(鳥取民藝美術館の創始者)設計の部屋や家具類があり喫茶室に使われていました。

また解体、再生をお願いした秩父の大堅工務所(大野豊代表)は、代々大工さんの家系で、現在は五人兄弟の長兄が親方、四人の弟と親方の二人の息子、数名の職人という非常に力のある木造専門の素晴らしい技術集団です。

移築する建物は、築百四十年程の雪国特有の茅葺き中門づくり農家。場所は新潟県東頸城郡牧村、持主の方は上越市内に生活し、最近まで祖父^{おじい}ちゃんに住んでいたため、状態は良好でした。

古い家は、何度か解体していたり、再利用材を使ったり、現代人よりもよほどリサイクルに取り組んでおり、この家もその通りでした。

昨年末に現地調査をし、今年の五月末から六月上旬まで、十人の職人が秩父から泊り込み、真黒な煤^{すす}にまみれ十日程で解体が終了、現在は工務店内できざみの工程中です。私も毎日煤落しに通っていますが、九月下旬から十月初旬には上棟を予定しております。

(秩父民具の会)

たくみ歳時記 南部鉄瓶

鉄瓶の品揃えが一番豊富になるのがこれからの時期です。毎年暑い盛りのも七月末には商品手配を終えます。

数年前、鉄瓶で沸かしたお湯が鉄分の補給にいいとテレビで宣伝されたところ産地に注文が殺到し大騒ぎをしました。すでに南部特産と言っても鉄瓶職人は高齢化して驚くほど少なくなっていました。



南部型霰 (1.8 l) 22,000 円



手取型 (1.7 l) 33,000 円

盛岡、水沢地区が特産ですが、それに中国が加わりました。型抜き量の産物が大量に出回っています。たくみでは昔ながらの伝統工法で作られた鉄瓶のみを扱っています。やかんで沸かすのとは一味違った趣があります。

使用法で気を付けて頂きたい事は、使い始め二週間程は必ず熱いうちに湯を空け、蓋を取り余熱で水分を飛ばしてください。空焚きは避けてください。そして鉄瓶の内側は絶対にたわし等で擦らず、ゆすぐ程度にしてください。

あとがき

今号の執筆者は地方で物づくりをされている製作者、民藝店、そしてたくみの顧客の方たちである。いずれも永年にわたる熟練の技、また生活の達人たちの、率直で実感あふれた文章には学ぶところが多い。

中学の美術教師であった鈴木先生からは沢山の写真を見せていただいたが、多くを割愛しお詫びを申し上げます。秩父の山下さんは元公務員、解体、再生中の民家の写真も次号に回させていただきます。その二、その三と、古民家再生のプロセスをご紹介します予定である。(S)

発行 株式会社たくみ
東京都中央区銀座八十四一
発行責任者 志賀直邦
電話 〇三―三五七―二〇一七
FAX 〇三―三五七―二一六九
振替 〇〇―一〇―二―三五六五九
定価 六〇円(税込)